

NPO 法人

第70号

# 芦安ファンクラブ通信

南アルプス地域の自然を愛するすべての人達に対して、地域の人々との交流を通じた南アルプスの環境保全及び適正利用に関する事業を行い、もって、南アルプス市芦安地域の活性化に寄与する。

～芦安ファンクラブの理念～

特定非営利活動法人芦安ファンクラブ 事務局 南アルプス市芦安芦倉 1578  
TEL 090-4135-3193 FAX 055-288-2722 HP <http://ashiyasu.com> Mail [afc3193@nus.ne.jp](mailto:afc3193@nus.ne.jp)

## 「四十年で止まった時間」 ～故塩沢久仙さん追悼登山～

芦安ファンクラブ 伊井和美

故塩沢久仙氏の追悼登山が、命日である九月二十四日に行われました。天気が心配されテントも準備しましたが塩ジイのパワーでとても良い天気になりました。その日は七十六回目の誕生日でもありました。

生前は多くの団体や個人と交流のあった人だけに多くの参加者が見守る中、長衛荘前で追悼式を行い、最期の地となった栗沢山へと出発しました。

私は、塩沢さんが夜叉神峠小屋の管理をしていた時からのお付き合いで、清水会長と北岳山荘の管理に入った時期があります。まだ衛星電話が普及する前で県庁との連絡は無線機で行っていて、塩沢さんの中継して行うこともあり、私自身、山の事も良く知らず色々アドバイスも頂いて居たのが四十年前の事です。

その後は、遭難救助や捜索に同行したり、登山道整備に行ったり、ご飯を食べに連れて行っていただいたりしたことも何度かあり、とても良くしていただいております。

山岳館のオープニング式典の準備を二人で行っていた時は、予算が無いのにあれを買え、これを買えと言い、最後は大きな「輪かんじき」を作らされる事になりましたが、山岳館の「シンボル」となっている「輪かんじき」を見る度に当時の事を思い出し、今ではいい思い出です。

また、いきなり何を言うかと思ったら、「俺がお前の後見人になるから、お前は顯慈(けんじ)の後見人を頼むぞ」と言われた事がありますが、結局息子さんの事を考えての事だったのかと思います。





まだまだ色々聞きたいことや、教えてもらわなければならないことが山程あったのに、それも今は叶わなくなりました。追悼登山に参加された方は勿論、参加出来なかった方々も、未だにあの塩沢さんがなぜと知っている人が多いと思います。南アルプスが一望出来る栗沢山で最期を迎えて一年になります。本来であれば孫と楽しく誕生日を迎えた事と思います。

芦安ファンクラブは勿論、県内外の関係機関にとっても、とても重要な人材をなくした事に間違いありません。今でも、山岳館の奥に座っている姿が目に浮かびます。大好物をお土産に持って遊びに行く嬉しそうな顔をして一緒にお茶をしたものです。

また、我が家に仔犬が来ると良く連れて行ったもので嬉しそうに遊んで居る光景も目に焼き付いています。決して怒る事も無く温厚な性格で、お酒を飲む人ではありませんでしたが賑やかな所は好きで、お酒の席も最後まで良くお付き合いしてくれました。まだまだ美味しい物も食べに連れて行って欲しかったです。頂いた、ちょっと短いピックルや海外へ行った時のお土産の登山ナイフは私の宝物です。あの笑い声は聞けなくなりましたが、多くの方々の記憶には残り続ける事でしょう。

また、朝の通勤時には、すれ違うと用事も無いのに電話をして来て「元気か」とか「用はねえわ」とか…。忙しい朝は面倒だなと思いながら電話に出たこともあります。楽しい一日を迎えた事です。

今後は、塩沢さんの意志を、清水会長を中心に進めていきたいと思っておりますので是非ファンクラブの皆さんや関係者のお力添えをお願いします。塩ジイ見ていて下さい。

そして、塩沢さんの大好きな南アルプスに訪れる多くの登山者やこの南アルプスを守って下さい。また、来年も元気に会えます様に！



9月24日(月)に第一回故塩沢久仙氏追悼記念登山と題してセレモニーと登山が催された。北沢峠の長衛小屋の前で行われたセレモニーでは、約60人の関係者が集まり、芦安FC清水准一会長の主催者挨拶があり、友人を代表して、内藤順造氏(日本山岳協会監事)と石原志穂子氏(環境省)に挨拶を頂いた。親族の塩沢顯慈氏の挨拶と全員の献花のあと早速登山を開始した。

頂上には満面に笑みを湛えた塩沢さんの遺影と焼香台が置かれ、参加者は銘々の思いで塩沢さんと心の再会をし手を合わせた。FCの伊井和美氏の慰霊の言葉にそっと涙をぬぐう姿もあちこちにみられた。

目の前には、鮮やかに晴れた青空に、滅多に見られない程にくっきりと甲斐駒ヶ岳と摩利支天の雄姿が迫り、一年前に心を馳せる追悼登山参加者の皆さんでした。

芦安ファンクラブ 清水 毅

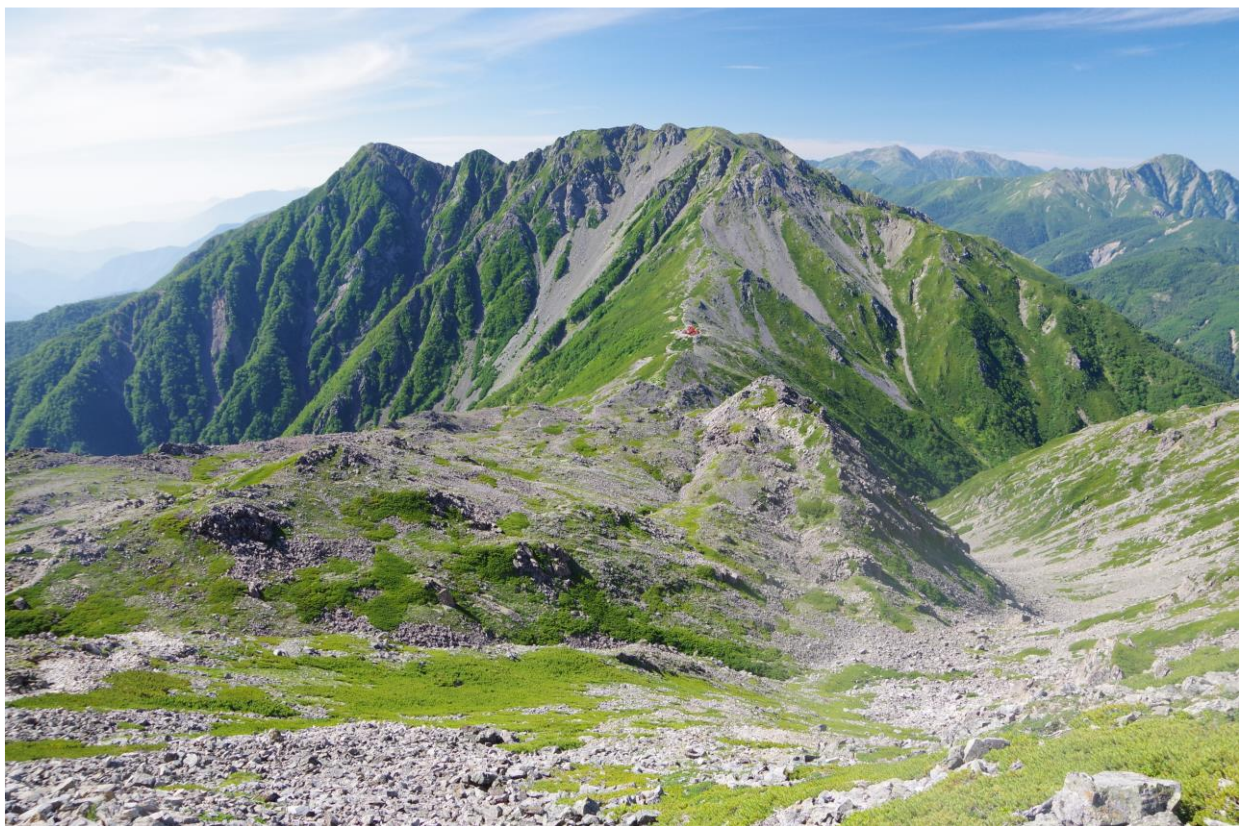


# 南アルプス学講座から 「南アルプスの山々の魅力⑥」

前芦安山岳館館長 塩沢久仙

連続講座として開催された「南アルプス学講座」。その中から、故塩沢久仙さんの講座の内容を抜粋してご紹介しています。今回はその6回目、農鳥岳。今回で最終回となります。

農鳥岳(のうとりだけ) 3026m 早川町、静岡市



間ノ岳から農鳥岳を望む

## 概要

白根三山の最も南に位置する。西側 1km に西農鳥岳があり、稜線は西農鳥岳から 90 度曲がり北に向かい間ノ岳に達する。南は広河内岳から白峰南嶺の山々へとつながる。北岳から農鳥岳までは標高 3000m を越える峰が続くが、これよりも南の稜線には 3000m を越えるピークは存在しない。農鳥岳は東側の農鳥岳と西側の西農鳥岳のピークがあるが、西農鳥岳は日本で 15 番目に高いピークである。ピーク間の鞍部は標高差が 100m ほどしかないため、少し離れて見ると一つの大きな山体を共有する巨大な山体を指して農鳥岳と呼ぶのが普通である。

農鳥岳の標高は三角点のある東峰の 3026m とするのが一般的であるが、西農鳥岳のほうが三角点峰より 25m 高いため、3051m を農鳥岳の標高とするデータもある。なお、西農鳥岳の山頂には久しく標識は無かったが、平成 24 年(2012 年)に山頂標識が設置されたが、白根三山の縦走路から少し離れているため、気づかずに通過する可能性もある。間ノ岳から南の白峰南嶺は、原則南北方向にのびるが、西農鳥岳と農鳥岳の間だけは東西に向きを変えており、西農鳥岳から農鳥岳を望むと富士山が農鳥岳の上に乗っかるように見える。

農鳥岳東面のアスナロ沢原頭部に現われる鳥形の雪形から命名された。雪形とは5月下旬になり、雪解けが進む頃に、残雪と岩肌を作る模様のもので、昔から農作業の目安としていた。農鳥岳の雪形は、白鳥が首を伸ばした形に見える。農鳥岳の古くからの雪形は山頂の斜面に大きく見られる物だが、近年になって新しく黒い雪形が認識されるようになった。鳥形と言えば普通は雪形、つまり白鳥を想像するが、農鳥岳の鳥形は露岩が黒く見えるいわゆる黒鳥である。しかし、「甲斐国志」で述べられている農鳥岳は間ノ岳を指し、現在の農鳥岳は「甲斐国志」では別当代とされる山の可能性が高い。

## 歴史

明治14年(1881年)アーネスト・サトウが白河内岳、間ノ岳とともに登頂している。小島烏水が明治41年(1908年)西山温泉から白剝山、白根三山、鳳凰三山、青木鉱泉の縦走時に登頂している。大正7年(1918年)武田久吉、小暮理太郎の南アルプス大縦走時に登頂している。大正13年(1924年)大月桂月が登山し、この時「酒のみて高根の上に吐く息は散りて下界のあめとなるらん」の歌を詠んだ。現在この歌碑が山頂にある。歌碑は昭和30年(1955年)に地元の観光協会などによって担ぎ上げられたが、その後真っ二つに割れてしまったが、近年新しい石碑が設置された。

## 地形地質

農鳥岳の山体は四万十帯白根層群の緑色岩、泥岩、砂岩、チャートで形成されている。間ノ岳同様に強い変成を受けた砂岩や泥岩が卓越しており、大きな山体を呈する。農鳥岳の東尾根付近には南アルプスが隆起する前の原地形である隆起準平原が残っており、平らで平滑な斜面が広がる。山頂直下の西斜面は周氷河性の平滑斜面となっており、現在も礫がゆっくりと移動している。なお農鳥岳では氷河地形は判然としない。西農鳥岳山頂はチャートと緑色岩で形成されており、周囲よりも硬い岩石である。そのため、山頂部は露岩しており岩礫地となっている。

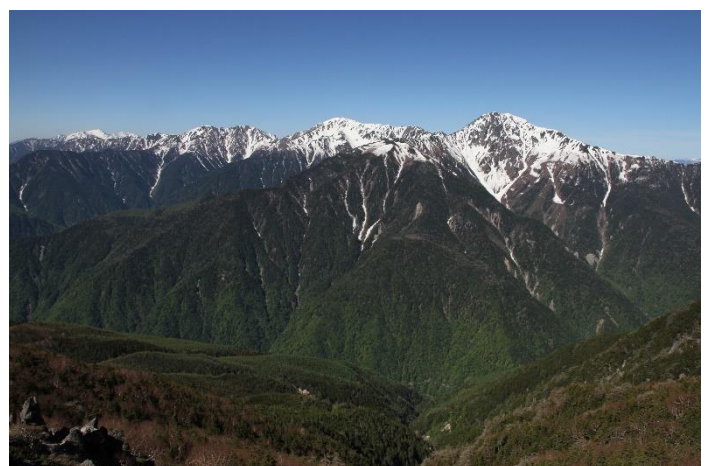
## 動植物

西農鳥岳の北側の標高2900m以上の地域は、白根三山の中でも高山植物が多く見られる場所である。シコタンソウ、クロクモソウ、チシマギキョウ、ミヤマオダマキなどがみられ、北岳周辺部の植生と類似している。三角点峰付近は砂礫地が広がっており、コメバツガザクラやミネズオウやハイマツがみられ、北側の岩場にタカネピランジがわずかにみられる程度である。その下部はダケカンバ、さらに低標高はシラビソを主とする亜高山性針葉樹林が分布する。オオシラビソの分布はほとんど見られず、1500m以下にはコメツガの優占林がみられる。

北岳や間ノ岳に比べて登山者が少ないため、ライチョウに遭遇するチャンスも多い。農鳥岳の登山ルートである大門沢沿いや樹林帯では、オオルリ、コルリ、ルリビタキ、コマドリ、ミソサザイ、コガラ、クイダタキ、ピンズイなどがみられる。稜線沿いではライチョウの他にイワヒバリやホシガラスも多い。



イワヒバリ



鳳凰からの白峰三山(右から北岳-間ノ岳-農鳥岳)



# 芦安中学校全校登山支援

## 芦安ファンクラブ 花輪初代

南アルプス市立芦安中学校では、30年以上前から全校登山に取り組んでいます。郷土の誇りでもある日本第2位の高峰北岳の麓に住んでいるのだから、郷土の文化・郷土の豊かな自然に触れ親しんでほしいという願いで、北岳・仙丈ヶ岳・鳳凰三山を卒業するまでに登ろう！という取り組みです。地域の支援者たちによって支えられ、芦安ファンクラブもその一端を担ってきました。折しも今年はYBSワイドニュースの特集番組「情熱デイズ」で芦安中学校の全校登山と芦安ファンクラブの活動を取り上げてもらうことになり、取材班のスタッフも同行することになりました。

私が全校登山の支援に協力しだして12年になります。どの年も、とにかく明るく元気な子供たちでした。今年は仙丈ヶ岳へ登りました。子供たちの年齢は13~15歳と変わらないのに、自分の年齢はどんどんかけ離れて行くばかりで、最近は楽しみより不安の方が大きくなっていくばかり。

でも今年の子供たちも明るく元気で、同行したYBSのスタッフにマイクやカメラを向けられてインタビューされても物怖じすることなく堂々と自分の意見を述べている姿は頼もしい限りでした。

また来年も一緒に歩けるといいなぁと切に願いました。



ガイドさんの話を真剣に聞く



北岳の歌を合唱



稜線をゆく



山小屋では皿洗いのお手伝い



ライチョウの砂あび



夕日観賞



# 芦安登山教室参加者の声

## ～北岳・百花繚乱～

### 2日間コース(7/12～13) 3日間コース(7/12～14)

江崎芳雄さん(千葉県習志野市)

登山教室初参加は16年前、夜叉神峠から望む冠雪の白根三山は今も鮮明に蘇る。当時から北岳登山教室があったが週日に休みを取れずにいた。はたと気付くとすぐに70の大台。まごまごしていると登れなくなると雨装備を買換え昨年参加した。大樺沢の雪渓、シナノキンバイ・ハクサンイチゲの大群落、そしてキタダケソウと北岳の魅力を満喫した。心残りには山頂からの眺めがガスでだめだったこと。そこで今年再挑戦となった次第だ。山頂の大展望はやはりだめだったが花を存分に楽しんだ。おまけはチョウノスケソウ。ハクサンイチゲ/チョウノスケソウ/キタダケソウの見分け方を予習したが、後ろ2者の見分けには自信がなかった。しかし井口さん解説の“チョウノスケの葉はワラジ”は的確で凝視するとなるほどワラジ。これで3者の見分けは達成だ。

花輪さんには小鳥の鳴き声も教わった。対面はなかなか叶わぬが声で分かるのは嬉しい。汗まみれの登りに鳥の声、メボソムシクイ、ダルリビタキだとわかれば元気が出る。

菅沼文英さん(山梨県北杜市)

7月12日、念願の北岳山頂に立つことができました。関係の皆様に御礼申し上げます。

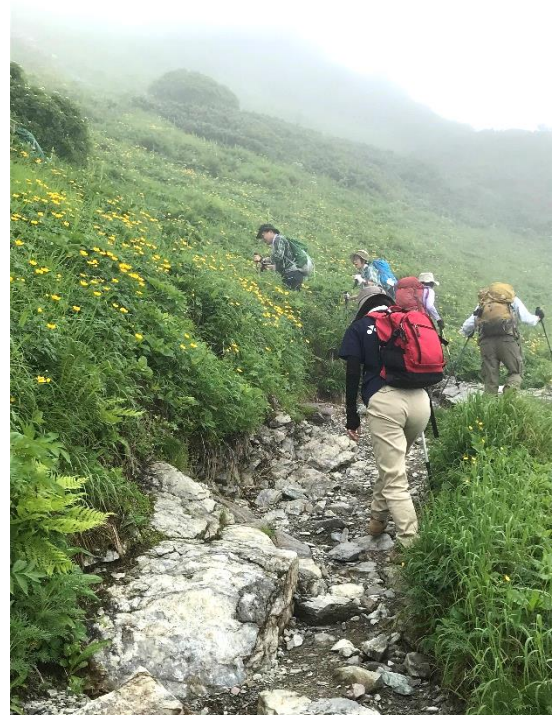
ハケ岳山麓に移り住んで30年、周囲の山歩きを楽しむようになったのがこの十数年です。今回、登山教室のご縁を得て、井口さん、花輪さんの適切なガイドに導かれ、いつの間にか山頂に！という三日間でした。

初日、広河原から白根御池小屋までの急な登りに、全身汗まみれになりながら山小屋に着いた時の安堵感。翌日、山頂までの登りも一面に咲く高山植物に感動しながら歩を進めました。あいにくの霧で周囲の絶景は見えませんでした。見かけた花々で大満足でした。三日目の朝はよく晴れ、北岳がどっしりと姿を見せ、御池に涼し気に山体を映していました。無事広河原山荘に着き、ガイドさん、参加者の皆さんとのハイタッチに疲れも吹き飛んだ気分でした。山荘の名物カレーランチもおいしかったです。

お陰さまで古希記念登山になりました。清潔で快適な御池小屋で笑顔で対応して下さいましたスタッフの方々、ありがとうございました。



白根御池にて  
自然観察



お花畑  
をゆく



### 工藤重治さん（静岡県島田市）

清水会長自らの開校式を芦安山岳館で行い、広河原へ。先週来からの天候不順で大樺沢コースが不通なためコース変更し、白根御池小屋・草すべり経由で肩の小屋へ。そこで昼食を済ませ、北岳を往復し、肩の小屋泊。下山は昨夜来の強雨もあり八本歯のコースを止めて、上りと同じ小太郎尾根分岐まで下り、右俣コースをとり大樺沢二俣へ、そこより白根御池小屋へトラバースし、上ってきた尾根道を広河原へ。芦安山岳館にて閉校式、受講修了証書を頂き、その後コーヒーを頂きながらの感想、コメント、意見交換で楽しい「百花繚乱 お花畑にご案内します 北岳(3193.2m)」を終えました。向かいの温泉入浴券もいただき、もちろん寄って疲れを癒してから帰路につきました。

上りの白根御池小屋付近までは北岳も良く見えていましたが、途中より曇り・ガスとなり、山頂では仙丈ヶ岳、甲斐駒ヶ岳、鳳凰あたりが雲間に見える程度で、翌日も同様でした。

でも望月さんより、たくさんの花の名前を教えてくださいながらの、自分にとっては新鮮で楽しい登山教室でした。

キタダケソウは今年は開花が早かったから見つかるかなーと心配されてましたが、最後の2輪を見つけてもらいました。キタダケソウの葉はくしゃくしゃとしていて、ハクサンイチゲの方は尖った葉をしている、それとハクサンイチゲより背が低いところで見分けるんです、よく似てるから間違えるとのこと。またこの時期には珍しいタカネマンテマも望月さんに見つけてもらいました。

肩の小屋では北岳の歴史の講義もあり勉強になりました。また北岳山頂にある三角点設置に纏わる望月さんの思い出、標柱自体は60kgもあること、さらにその下には盤石があること、結構な大きさなんですよ、とこちらもこの教室に参加しなければ知らないことも教えてもらいました。

今年初めて参加させてもらいました。天候は素晴らしいとは言えませんでした。教室ならではの花の名前、地域・地勢の勉強、地元ならではの逸話がたくさん聴けて、来年もぜひ参加しようと思いました。芦安ファンクラブの皆様、山小屋の方々、関係者の皆様ありがとうございました。



山頂の三角点



肩の小屋



タカネマンテマ



山頂にて(3日間コース)



山頂にて(2日間コース)

# 【連載】私と「山」と⑨

## ～中国での山登りを振り返ってⅡ～

芦安ファンクラブ 井口功

今回は中国に5回(延 124 日)行った登山の内、3回行った四川省での山登りを振り返ってみた。その2回目です。

2006 年四川省、理県の“雪隆包山”(5588m)、黒水県の“奥太娜峰”(5210m)、それと小金県の四姑娘山山群の一角にそびえる“二姑娘山”(5454m)の登山を振り返った。

四川省は、日本から余り時間を掛けずに山に入れ、4000m近くまで緑が有り、まだ知られていない未知の魅力に溢れた山が沢山ある地域で、少ない情報から登ろうという山を探し雪隆包山を見つけ出した。この山はまだ日本では殆んど知られていない山で、中国でも 2002 年 5 月と 10 月に登山記録がある程度の情報の少ない山であった。

中国の李慶さんに連絡して、登山許可、移動の車、宿泊や食事など全ての対応をお願いした。雪隆包山は成都の北西の理県にあり、車で 1 日で山懐まで行けるところで、そこからBCまで 2 日のキャラバンで登山活動に入れる山であった。期間を 8 月 13 日に山梨を出発、9 月 2 日山梨に帰る 21 日間として計画した。三枝、井上、光本、井口の 4 名が縦の木山岳会、近藤が唐松山岳会の 5 名で実施した。

8 月 13 日、山梨⇒成田⇒成都

成都空港には雪豹のスタッフの“トウさん”、“ケンさん”、“カエイさん”が出迎えてくれた。トウさんは昨年一緒に旅をしていた。日本語が解る人達で一安心した。

14 日、成都⇒理県⇒上孟

車で 16 時 30 分に上孟に着き村長らしき人の家に泊まった。

### 雪隆包山登山 (5588m)

15 日、上孟部落 (2100m) で現地ガイドを雇い、15 人の地元のポーターに登山装備を託し、私たちは貴重品と雨具、カメラ、行動食をサブザック

に入れて、今日のキャンプ地の両河口に向かう川に沿って、右岸左岸と高巻きをしながら進んだ。両河口 (3400m) には 13 時 20 分に着いた。目的の雪隆包山を雲の切れ間から見る事が出来たが、夕方から雷鳴と稲光が非常に激しくして、やがて激しい雷雨となった。これが今回の天候悪化の始まりで、ガイドの言うのにはこれまで、一月晴天が続いたので、暫く天候が悪くなるだろうとのことであった。

16 日、雨具を着て出発、暫く河原の中を進み、右側の急峻な斜面に取り付く。シャクナゲの林の中を登ってゆく。開花時期には素晴らしい花を付けることだろう。森林限界に近い辺りで、石を積み上げた様な、粗末な石小屋がいくつもあったが、四月から五月にかけて冬虫夏草の採取に来るための小屋だそうだ。急斜面を登り切ると、モレーンで堰き止められた湖が現れた。この湖の右岸を歩き、奥の氷河の水が流れ込む付近がベースキャンプの予定地 (4100m) だった。テントを設営し、ポーターたちは今日中に部落まで帰る、と下山していった。



ベースキャンプ

私たちは明日からの登攀に備え装備の点検、準備をした。雲の中、頂上付近や下部の岩場をすぎてからの氷河(氷壁)が時々見えた。どのルートを取ればよいかガイドに聞いてみると、明日はキャンプ1 (C1) の予定地まで同行するという。



そこからの登攀は装備がなければ登ることが出来ない、私たちだけの登山活動となる。中間部の氷河を登るルートを取るのならば、スクリュールハーケンとザイルがとても足りない、参考にしてきたルート図の通りであれば右側のルンゼの中を登り中段に登りあげることが出来るはずだ。

17日、BCを後に草付きの尾根を下部の岩壁目指して登った。下部の岩壁はさほど難しくなく、ノーザイルで岩壁の上に出ることが出来た、右に回り込み氷河の下部にたどり着いた。この辺りがキャンプ1(4400m)の予定地だそう。BCから2時間半くらい、私たちは今回キャンプは一つにする予定なのでこの上のキャンプ2迄あげる予定、氷河を目の前にして(5月の中国隊は氷河をルートにしていた)アイゼンを付けていよいよ登攀開始、氷河にアイゼンの爪を立てて登り始めるが、氷がとても硬い、ツアックの先がわずかに入るだけで、2月のブルーアイスでももうすこし柔らかいのではないと思われる程だ、強く蹴込まないと登れず、足が痛い、150mから200m、氷河上の水の流れている所や小さなクレパス状の所を選んで登って見たが爪先だけで立っていなければならずバランスが悪かった。登るにしたがって傾斜もきつくなり、ダブルアックスでなければ危険を感じた。この状態の氷河を、私たちの装備で登ることは無理と判断、氷河からの登攀はあきらめ、ルートを右側の岩壁を登り中間の緩傾斜帯に向かうことにして、装備をデポしてBCに戻った。

18日、昨日C1予定地まで装備が上げてあるので今日は食べ物とわずかな装備を持って右側の岩壁を通過すべく、急いで登り氷河の取り付きにたどり着いた。昨日気になっていた氷河上の大きな岩(不安定で落ちれば登攀ルートに落ちてくる)の確認をすると昨夜の雨のためか見あたらなかった。



氷河を登る

氷河を右に回り込み岩壁の取り付きに急ぐ、ルンゼを登り、取り付きまで来てみると、越せそうに思っていたスラブが大きくて通過は不可能だった。仕方なく再度氷河の横からクレパスを縫って中間部に登れないかと、パイプスクリュール2本と50センチザイル2本で氷壁を100m程登ったが、それ以上は手持ちの装備では無理と判断、全員今回の最高地点(4500m)を体験して、懸垂下降で氷河の取り付きに降りた。上部の登山を断念しBCに下山した。

19日、ポーターへの下山連絡にガイドが下った。

20日、休養(ポーターが来るのを待つ)

21日、ポーターが朝、登ってきてくれ、BCを撤去し上孟部落までひたすら下った。

BC 8時50分出発、両河口12時40分通過、上孟部落16時30分到着

雪隆包山の中国隊5月の登山記録を参照して計画したが、記録では積雪がかなりあり、ルンゼなども埋まっていたそれ程大変な登山で無く書かれていた。しかし現状は硬い氷河、つるつるの岸壁で装備不足、そして天候不良など、情報不足がこの登山を失敗に終わらせた。

雪隆包山から早く下山したので、次の山を試みた。

22日、上孟部落9時出発⇒黒水县城⇒三奥村15時30分着



メンバーと共に(中心が井口さん)



雪隆包山



# モニタリングサイト1000 「高山帯調査」

## 芦安ファンクラブ 堀内 訓

みなさん「モニタリングサイト1000」を知っていますか。環境省が平成15年から始めた長期モニタリング事業です。重要な生態系を対象に、全国の合計約1000ヶ所で調査を実施しています。長期とは、どのくらいの期間か想像がつかますか。なんと、100年間を目標にしているのです。その中の高山帯は全国で5ヶ所。北アルプス（立山・蝶ヶ岳～常念山）・大雪山・白山・富士山、そして南アルプスの我々が「北岳」が指定されています。この北岳の調査を請け負っているのが「芦安ファンクラブ」です。そこで今回、私が調査に同行することになったのです。キタダケソウ研究者の名取俊樹さん、自然環境研究センターの脇山さん・北村さんと一緒に調査を行いました。3人とも、その道のスペシャリストで、豊富な知識と実践経験をお持ちの方々でした。

高山帯は原生の自然が保たれ特有の動植物が生育・生息していますが、その一方で地球温暖化等による気温や積雪の変化や、登山者の増加の影響も受けやすく、近年では鹿の増加による高山植物への影響も心配されています。

北岳では、北岳山荘とトラバース道付近で高山植物の植生・開花・気温・地温・ハイマツの成長、トラバース道と肩の小屋付近、大樺沢二俣からの右俣コースでチョウ類の調査を行っています。

**気温・地温**＝1年を通じて気温、地温（地下10cmと地表面）を1時間おきに測定。地温のデータから積雪や土壤凍結の期間、雪解けの時期を知ることができます。



**ハイマツの伸長量**＝ハイマツは夏の気温が高ければ、翌年の枝の伸びがよくなるといわれています。1年間に伸びた枝の長さを5年に1回、過去20年分測っています。気温のデータとあわせ、伸長量を調べています。

**高山植物の開花時期**＝自動撮影できるカメラを使い、毎年初夏から秋にかけて一定間隔で高山植物を撮影。画像から種類ごとに開花時期を判読し、年毎の比較を行っています。

**チョウ類**＝お花畑の調査地や一定のルート（2～3km）をゆっくり歩きながら、高山帯に生息するチョウ類の種類と数を記録。年毎の比較から温暖化など気候の変化に伴うチョウ類の変化を調べています。



登山中、あるいは山荘の中で名取先生や研究所の方々とは色々な話をしました。その一部を紹介します。

キタダケソウを温室で栽培したことがある。開花に5年かかった。双葉のまま1年を越すものもあった。塩沢さんからは、霧を吹きかけるとハクサンイチゲはベタっとするが、キタダケソウは霧をはじくと聞いた。

山梨では標高順に広葉樹-針葉樹-高山種になっているが、日本海側では広葉樹の上の針葉樹を欠く山がある（偽高山帯、例えば鳥海山等）。日本海側は主にオオシラビソ、太平洋側はシラビソと気候により発達の方が違う。

キタダケソウは土壌phの高いところに生息する。ハイマツは土壌phの低いところを好み、ハイマツが生育し難いところに、キタダケソウが生育している。

ヨーロッパでは氷河に広く覆われたから、多くの植物が絶滅した。それに比べて北岳を含む日本では氷河あまり発達せずキタダケソウを含む多くの植物が生き延びた。

日本海側のオオシラビソは、最終氷期後分布を拡大したが、山によってはまだ分布していないところもあり、偽高山帯となっている。

塩沢久仙さんは古くからの友人であり、また、山の全てを熟知している人であり、良き先生だった。相談するとすぐ実行に移してくれた。多くの人から信望があった。